

## 発つ鳥いささか跡を濁す

末 木 文美士

大学院入学の口述試験で、主任教授の中村元先生から、「大学院を出ても就職はないが、親はそれでも許してくれたか」と尋ねられた。それを承知で入学したわけだが、それでも本当に就職で苦労するとは思わなかった。研究室の助手をしたまではよかったが、その後路頭に迷った。中村先生が創立した財団法人東方研究会（現、公益財団法人中村元東方研究所）の研究者という名目は頂いたが、無給に近いものだった。親の反対を押し切って結婚し、彼女のアパートに『大藏経』とせんべい蒲団だけを持って転がり込んで、養ってもらった。「そういうのを京都では北白川殿というのだ」と、後に中国哲学の福永光司先生に笑われた。そんなジゴロのようなのが、北白川あたりにごろごろしていたらしい。

就職浪人五年で、古巣の東大の印度哲学（現、インド哲学仏教学）の助教授に採用された。特別優秀だったわけではない。前任の田村芳朗先生の弟子で、一応日本仏教の専門家として残ったのは私一人しかおらず、他に選択の余地がなかったわけで、苦渋の人事だったのだらう。当時の東大文学部は、まだ昔流の「象牙の塔」の雰囲気が残っていた。ゼミ生は二、三人、授業は年に一二、三週すればよく、学生が少ないほど、純粹な学問だと威張っていた。教授会は儀礼の場で、配布資料はなく、最初に事務長が二〇分くらいかけて前回の議事録を聞き取れないほどの早口で読み上げるのが見事で、その間にぞろぞろ席に着く、という具合だった。人

事の際の基石投票は今でもされているやり方で、古色蒼然とした木箱を回して、その中の基石を木箱に取り付けた投票箱に入れるのだが、隅の方に坐っていると、白（賛成）の基石の残りが少なくなり、探し出すのに苦勞した。

そんな牧歌的な状況が大きく変わったのは、一九九〇年代の半ば頃で、それまでの小講座制（教授・助教授・助手各一人で一講座）から、研究室単位の大講座制に移行し、ほぼ同時に大学院重点化が進められた。大学の社会貢献がかましく言われるようになり、「象牙の塔」が槍玉に挙げられた。ちょうど教授に昇進したばかりだったが、その後、ずっと改革という名の改悪に反対し続け、孤立することになった。

「象牙の塔」と言われようと、社会貢献がなかりうと、いいではないか。そういう何の役にも立たないことをこつこつと続けることに、学問の真の価値があるのだという信念は、ずっと揺るがない。ある東大総長が、卒業式の訓辞に「職人であってはならない」と説いて話題になったが、それは間違っている。学者は職人でなければならず、本當の学問とは、名人芸的な職人技に他ならない。気の利いた論文を書くよりも、きちんとテキストが読めるほうが、職人としてよほど価値が高い。その技を磨き、継承していくことが、本来、東大・京大などの「象牙の塔」大学の使命であつたはずだ。

だが、實際上、そういうアナクロ的な超保守主義は通用せず、時代に流されることになった。学生数の少ない専攻はポストが減らされ、インド哲学仏教学はもとにその被害に遭つた。大学院重点化で、定員いっぱいには院生を入学させなければならなくなり、その指導に追われるようになった。課程博士をどんどん出せと言われても、その先の就職先はますます狭くなるばかりで、大量のオーバードクターが社会問題となった。

その場しのぎの国や文部省（文科省）の思い付き政策に追随し、大学はどんどん自主性を失っていった。その総仕上げの大きな転機が国立大学の法人化であった。もとは公務員削減の数値目標達成のために、国立大学教官を一気に非公務員化して数合わせをすることだったらしい。何故かほとんど反対もなく、大学内の議論もないままに、既成事実化して進められた。

だが、その後、どんどん国家予算が削られ、大学は自助努力なるものを要請されるようになった。大学は実利を超えた崇高な真理探究の場（たとえそれが幻想であったとしても）ではなくなり、一種の企業として、完全に世俗の経済原理の中に組み込まれた。大学間の競争が激化するとともに、大学内も無法化し、外部資金の導入に巧みなところが幅を利かせ、学部自治や、まして小さな研究室の自治など完全に吹き飛んだ。時間のかかる職人的修練は見捨てられ、短期で見た目のよい成果があがるプロジェクトばかりが横行するようになった。強迫観念にかられたように、次々と「改革」に追われ、何のための「改革」なのかも分からなくなつた。東大は政府のお膝元として、国のお先棒を担ぎ、国策を先回りしなければならぬかのような、おかしな使命感があり、それが「改革」の横行に拍車をかけている。

それは結局、大学教員の首を自ら締める結果となる。東大には二三年在職したが、最初と最後では、仕事量は確実に数倍になっている。私立大学の忙しい教務担当から東大に移った教員が、以前に倍する忙しさで、悲鳴を上げたほどである。それでも、確かに東大の教員は優秀である。ただ、かつての「象牙の塔」時代に較べて、官僚的になったというか、理念や哲学を論ずることがなくなり、実務型が多くなった感じは強くなる。

忙しさが増しても、気力と体力が具わっているうちは、第一線を先頭に立って走っていると

いう使命感と充実感は、他では得難いものがある。学生も優秀だから、それなりに打てば響くし、大学院の演習は実際にはレベルの高い研究会と言ってもよく、私のほうが受け取るものも大きい。二〇人の指導学生の相談を次々に受け、毎朝五〇通を超えるメールを処理し、研究室の主任としてその運営に当たるのは、確かにやりがいのある仕事ではある。それが日本の学界を動かすことになるという責任感も大きい。

それでも、五〇歳を過ぎると、このままでよいのかと、不安になってくる。決められたコースをひたすら走る競走馬でなく、もう少し途中で草でも食べながら、のんびりよそ見をして歩いてもよいのではないか。移籍先がなくても、六〇歳になったら身を退いて、貧乏しながら、自分のしたいことをしようと思うようになった。

そんな時に日文研からお話をいただいて、飛びつくことになった。就職浪人していた頃、日文研創設の動きが始まり、福永先生から、「梅原君に推薦しておく」と言われて期待していたが、後に、「梅原君から何の相談も受けなかった」と怒っていた。そんなわけで、縁のないところと思っていた。それが、瓢箪から駒のように、あれよあれよといううちに話が進んで、桂坂に通うことになった。

最初の頃、どのバスがよいか分からないので、桂から市バスに乗ると、ぐるぐると連れ回され、そのうちに乗客は誰もいなくなつて、本当に着くのか不安になった。学生でゴつた返す大学を当然と思っていた身には、誰もいない日文研の構内は、何だか廢墟に迷い込んだ感じがした。少し慣れると、見事な枝垂れ桜をはじめとして整備された庭が安らぎを与えてくれ、圧迫感のない和洋折衷の建物も気に入った。英国モデルの図書館の入り口も立派だが、ただ使い勝手はあまりよくない。レストラン赤おには悪くないが、それ以外に近所に食堂もコンビニもな

いことには、閉口した。

イブニング・セミナーや木曜セミナーは気に入った。これも英国のカレッジなどがモデルなのだろうが、海外の研究者を交えて、くつろいだ雰囲気自由で議論を楽しむというのは、学問の原点である。こういう雰囲気は絶対に守らなければいけない。もともと最初の頃は、まだ東大時代の何かにせかされるような気分が抜けきらず、時間だけ長くて何も決まらない会議に苛立つことが多かった。

移籍と同時に、住まいを京都に移した。京都住まいも夢であったが、これも一生夢で終わるかと思っていた。たまたま知人のマンションが空いているというので、安く借り、憧れの京都町中暮らしをすることになった。京都は中都市の規模で、メ大都市東京と較べると、生活上は不便なところもあるが、街の大きさとしてはちょうど手頃だ。人の歩く速度が東京よりずっと緩やかで、安心する。それに、何よりも歴史の堆積の上に住んでいるのだから、歴史に関わる研究者にとっては、資料に埋もれて暮らすようなものだ。日文研の研究環境とともに、京都という住環境もまた、私の学問を大きく変えることになった。

そんなわけで、あっという間の六年間であった。公的勤務の最後を日文研で迎えられることは、身に余る幸福である。もっとも、六年程度だからよいところもあって、もっと長く勤務を続ければ、おそらくいろいろないやなところが鼻についてきただろう。日文研の雰囲気は一種ぬるま湯的なところがあるから、うっかりすると、世間の常識から外れることになってしまう。学際的で自由な研究ができることはよいが、これも切磋琢磨が避けられることで、学会の常識を外れた独断に陥る危険がないわけではない。

いまだによく分からないのは、組織としての意思決定の責任を誰が取るのか、ということ

だ。センター会議が大学の教授会に当る決定機関と言えるが、そのために、所員会議で決定を伝えられるだけの所員は運営に責任を持たず、センター会議の委員とそれ以外の所員の間で意識の差が生ずる。さらに、外部委員を加えた運営会議が最終決定の場であるから、一層責任の所在が曖昧になる。人事のような重要な案件には、もう少し慎重で厳格な審議のルールが必要であろう。

総合研究大学院大学の一部として、大学院生を受け入れていることは、ともすると軽く見られがちだが、じつは非常に重要なことだ。学生が多すぎると、その指導で疲弊するが、まったく学生がいないと活気が失われる。次代への研究の継承という点からも、数は少なくとも学生を育てることには、もっと力を入れてもよいだろう。言い出せば、いろいろ問題は出てくるが、私たちの世代が抜けて若返ることで、新しい発展があるだろうから、日文研の将来はそれほど心配していない。

日文研を辞めて、年金暮らしの自由人となる。しばらくは空手形のようにになっている執筆を片付けなければならないが、あまり未練たらしく学会ボスのような形で老残の身を曝すのも本意でない。しばらくは時に誰かがふと思ひ出し、やがて忘れられるというくらいが、ちょうどよいのだろう。諸行は無常である。

(国際日本文化研究センター教授)